



異世界で幼女化したので
養女になったり
書記官になったりします 2

瀬尾優梨

Yuri Seo



レジーナ文庫



マリウス

ベルフォード王国の国王。気さくな性格だが、したたかな側面も併せ持つ。



エーデル

ベルフォード王国の王妃。包容力あふれる、たおやかな美女。



マーカス

ベルフォード王国の王弟。マリウスの右腕として政務を担いつつ、書記部にも籍を置いている。常に微笑みを絶やさない正統派イケメン。



ゲアリー

アジェント伯爵で、ヴェインの兄。黒ずくめの服装を好む謎めいた人物。



カスミ

玲奈の専属侍女。忠誠心が強く、玲奈の敵には容赦しない。



イサーク

フェスティーユ子爵の長男で、玲奈の義兄。書記官を目指して勉強中。



ティル&ミーナ

精霊。小鳥と猫の姿で玲奈を守護している。



ヴェイン

「紅の若獅子」と名高い、近衛騎士団の部隊長。目つきは悪いが、王宮内でファンクラブができるほどの美形。



レン

異世界トリップしたら、なぜか幼少化していた元大学生。フェスティーユ子爵の養女になったことをきっかけに、男装して「レン」と名乗る。国の重職・書記官として活躍中。

みなせれいな
水瀬玲奈

レンの本来の姿。もふもふ大好きな20歳の女子大生。

目次

異世界で幼女化したので
養女になつたり書記官になつたりします 2

書き下ろし番外編
兄、頑張る

異世界で幼女化したので
養女になつたり
書記官になつたりします 2

第1章 本当の私

人生つて、何が起ころか分からない。

それこそ、大学に行く途中で穴に落ちることだつてあるし、異世界に放り出されて体が縮むことだつてあるだろう。精霊と契約して、なりゆきで貴族の養女になり、國のエリート部署に就職することだつて……あるよね？　あると言つてくれたまえ。

私、水瀬玲奈はモフモフ動物を愛する二十歳の大学生。大学にレポートを出しに行く途中、いわゆる異世界トリップというやつを果たした。気がつくと小学生くらいに若返っていた上に、猫と小鳥の大変愛らしい精霊たちと契約を結んでいて……その精霊ミーナとテイルのおかげで、私はこの世界の共通言語を喋れるのだそうだ。

そんな私を拾つてくれたのは、ベルフォード王国で子爵の位にある貴族、アルベルト・フェスティーユ。彼は路頭に迷う私を養女に迎え、「レーナ・フェスティーユ」という名を与えてくれた。私は優しいお母様やツンデレファイバーな兄、可愛らしい弟妹たち

とともにしばらく暮らしていたのだが……それだけじゃダメだ、私はいつか地球に帰るんだという思いを捨て切れなかつた。

帰るための手がかりを得るため、私は国の重職の一つである書記官の登用試験を受けた。子爵家に迷惑を掛けないように、「レン・クロード」という平民の少年を装つて、日本の義務教育のたまものである計算能力を存分に活かして合格した私は、書記部の素晴らしい仲間たちと共に職務に励むことになつた。

とはいえる新たな生活は平稳無事な毎日とは言い難かつた。王妃様と遭遇したり、人見せられたけれど、その場には子爵領を出る際に仲違いをした兄、イサークがいたり、王様に突撃訪問されたり。

なんだかんだ王都で楽しく賑やかに過ごしていた私は、お父様に呼ばれて一旦フェスティーユ子爵領に戻ることになった。久しぶりの再会を果たした家族に書記官になった姿を見せられたけれど、その場には子爵領を出る際に仲違いをした兄、イサークがいた。その後二人で会話をしたことで、ようやくわだかまりが解けて……

うーん、こうやって振り返ると私、ここ数ヶ月で凄まじい体験をしてきたな。なんで幼女化しているのかとか、そもそもどうして私はこの世界に落ちてきたんだろうとか、疑問に思うことはたくさんある。でも、忙しくて、時にはヒヤヒヤするような

事件が起ころうの日々を、私は案外満喫していた。
……私つて、結構単純なんだろうね。

＊＊＊

お父様が手紙に書いていた「祭り」というのは、豊穣^(ほうじょう)を祝う感謝祭のことだった。この感謝祭は、毎年この日に行う！ つて決まっているわけではないそうだ。リンゴが大量に実った時に、豚が丸々肥えた時に、トマトがとりわけ大粒に生^なった時に――と、農作物などの収穫に応じて、不定期で行われるものなんだって。

「今年は小麦がよく育ったからな。たくさんの小麦料理を領民に振る舞うんだ」「祭りとは？」と問うた私に、お父様はそう説明してくれた。それから、「レーナは、しばらく皆の前に姿を見せていないから、そろそろ出てきてほしいと思っていた」とも。そんなことを言われたらもちろん、目一杯お洒落^(しゃれ)して出かけますとも。全然親孝行らしいものができないんだから、お祭りに参加して領民に挨拶するくらい、何でもないですとも！ ついでに美味しい小麦料理を堪能できるなら、文句なんて言いませんとも！

感謝祭の会場は、フェスティーユ子爵家の館^(やかた)の前にある大きな広場。領のあちこちから來た領民が参加できるよう、この日だけはお父様の方で手を回して各地に馬車を派遣しているんだって。ちなみにフェスティーユ子爵領は諸侯の領地の中では狭い方だけど、それでも面積は相当なもの――端から端^(はざ)への移動だと馬車で一日かかるらしい。

わざわざ足を運んでくれる領民の皆さんのために、レーナ・フェスティーユもお手伝いします！

パンのように大きな竈^(かまど)を使う料理^(やかた)は、館の厨房^(ちゅうぼう)で対応しなければならない。けれど、それ以外の料理は地元の皆さんとの協力を得て、野外で作ることになっていた。そのための特設テントなどを設置する作業に、お父様やイサークお兄様も現在駆り出されている。力仕事、ガンバ！

現在厨房^(ちゅうぼう)は、製粉^(せいふん)作業の真っ最中。全ての小麦を挽き終えるのは明日だから、私は明日作るパンのメニューを考えていた。

私がお手伝いのために厨房^(ちゅうぼう)に入ろうとしたところ、「お嬢様が料理なんて！」と料理人たちが慌てたんだけど、お母様同伴という条件のもと、参加させてもらうことになつた。平民生まれのお母様が厨房^(ちゅうぼう)に出入りするのはこの家ではもう当たり前なので、料理

長もお母様を止めたりしない。

私はお母様に、明日制作予定の料理リストを見せてもらう。うーん、当たり前といえば当たり前なんだけど、やっぱりこの世界のパン、種類が少ないよなあ……

「バジルロールにダイスチーズ入りのパン……トマトソースとサラミでピザ風パン……ヨモギを練り込んだヨモギパン……」

「お嬢様、どうかなさいましたか」

おっと、私の呟きを料理長が聞いていました。子ども向けアニメに出てくる某パン職人そつくりの、ころつと太つたおじさん料理長。彼は、屋敷内で異端扱いされていた私にも丁寧に接してくれて、こつそりお菓子を分けてくれるようなナイスミドルなのだ。

「いえ……パンにも色々味があつたらおもしろそうだな、と思いまして」

「ほう……色々味のパンですか。王都で召し上がつたのですか？」

料理長も興味を持つたらしくて、小麦の製粉作業を部下に任せて私の話に耳を傾けてくれた。こんな私の呟きにも真摯に対応してくれる料理長、ステキ！

……ただ、本当は王都エルシュタインで経験したから思いついたわけじゃなくって、日本で食べていたからなんですけどね。

「ええっと……まあ、そうですね。王都では遠く離れた地の文化について聞くことも、

変わった料理を食べる機会もあったので」

これは嘘じやない。書記部の同僚であるジェレミーやクライドに連れられて、よく城下町の料理屋に行つたんだ。そこで、エスニック系の料理店とか中華っぽいのとか、懐かしきお米を使った料理を出すお店まで発見した。異文化交流、ステキです。

「異国では食材を組み合わせることで、新しい味を開発しているそうですよ」

「先ほどおっしゃっていた、バジルロールやらサラミというのも、異国の文化でしょうかね」

さすが料理長、記憶力もばつちりだ。一瞬の呟きを記憶しているとは。

「はい。……でもこの辺では、バジルはあまり食材に練り込んだりしないですよね」

バジル自身は存在しているはずだ。バスタに乗つかつてているのを見たことがある。でも、あれを細かく刻んでパンの生地に練り込むとか、そういう発想はないみたいだ。日本の実家で母さんがパン作りにはまつっていたのを見て分かつたことだけど、ぶっちゃけ新しい食材を放り込んで焼けば新しい味のパンが生まれるんだよ。

料理長は目を瞬かせ、ふーむ、と考えるそぶりを見せる。

「バジルか……小麦粉は今、大量にありますし、この機会に新たな試みをしてみるのもおもしろいかもしませんね」

「ただの思いつきだったんですけど、いいんですか？」

「もちろん。異国の中でも文化を吸収して自領の調理技術を高められるなど、料理人としての好奇心が疼きますよ」

「うう、そう言つてにつり笑う料理長——ああ、笑顔が眩しいです！ 王都ではイケメンもさんざん見てきたけど、おじさんの優しい笑顔も素敵です！」

「まあ……レーナ、新しいパンを思ついたの？」

「ふつ飛んだ発言をしては不審な目で見られてきた私だけど、この場にいるのは料理好きばかり。未知なるパンの開発と聞いて、好奇心センサーが反応したんだろう。

「はい、お母様。王都での経験を踏まえて、新たな味を開発したらおもしろいと思うのです。普通の白パンやクロワッサンもいいのですが、生地に色々練り込んでみてはどうかと」

話している間にも、知的好奇心と探求心と、冒險心が私の中でもくもくと湧き上がつてくる。

「そうだ、十歳の今なら、少々無茶しても斬新なことを言つても許されるんだ。

「私、新作パンを開発します！」

翌日、私の提案を受けて厨房に様々な食材が持ち込まれた。

「料理長、材料が揃いました」

昨日と今朝で買い出しに行つてくれた若い料理人は、それらを見て不審そうな顔をしている。どうやって調理するか、不思議なんだろうね。

「ふむ……まずは摘みたてのバジルと、ブロックチーズ。トマトにサラミにニンジン……メルコムの葉も手に入つたようだな」

袋の中身を点検していた料理長は、乾燥した葉っぱを紐ひもでまとめたものを取り出した。日本と同じ食材が同じ名前で手に入ることも多いが、この世界に存在しない植物だけほど、ヨモギに詳しくない。そういうわけで、困った時の精靈頼みだ。でもちろんある。ヨモギがいい例だ。

「……ねえ、二人はヨモギって知つてる？」

茶トラ猫型の精靈は、ミーナ。お転婆で好奇心旺盛。猫らしく気まぐれで、モフモフ。メジロのようにコロツとした青い鳥型の精靈は、ティル。性格はミーナと似ているけれど、ミーナよりは落ち着いている、モフモフ。

ちなみに精霊には雌雄の分類はないそうだけど、私と脳内会話する時の声や口調からして、二匹ともメス寄りだと思う。

『ヨモギ？……ああ、なるほど。玲奈の世界の植物だね。おもちに入れたりするんだつけ』

『ティルたちは食べたことないけど、いい匂いがするよね』

『それに似た植物って知ってる？』

『うーん……。あつ、メルコムの葉がそっくりだよ』

『そうそう。春の初めになるときれいな川の近くに生えるの。たぶん、お店でも乾燥したものを作ってるよ』

『つて感じで。』

ミーナやティルと相談した後、件の代用食品を調達しに行つてもらつたんだ。さすが精霊、日本のことにも精通しているのかと感心したのだが――

『もともと知つてたわけじゃないよ。玲奈が持つてる知識を、ミーナたちも共有してるだけ』

『…………うなの？』

『そう。だから、ティルたちも地球について全部知つてるわけじゃないよ。分かるのは、

玲奈が知つてることだけ』

なるほどね。私にヨモギを食べた経験があるから、私と契約しているミーナやティルも、ヨモギがどんなものか分かるのか。

『それから……おお、たくさんのドライフルーツですね』

「はい。果物の砂糖漬けもあつて、見た目も味も楽しめますよ」

「なるほど。……カルルの花もありますね」

ふふふ、カルルもまた、ミーナたちの力を借りて見つけた品なのだ！

他にどんなパンを作ろうかと、私は日本で食べた料理を思い出していた。

『うん、久しぶりに。……日本のカレーの味を出せる食材って、知つてる？』

『いい匂いといえば カレーライス……』

『玲奈、カレーが食べたいの？』

『うーん……辛いだけでいいならタバッスコがあるけど、それだとダメなんだよね』

『ティル知つてる。カルルの花の根っこが、似たような味なの』

『秋頃に咲く花だよ。すごく派手な黄色の花びらで……普通は食用じゃないんだけど、根っこをよく洗つてすり潰すとそれっぽい味になるよ』

『カルルの花……今手に入りそう?』

『大丈夫だよ。お花屋さんにある』

というわけで、料理人のお兄さんは不思議そうな顔をしつつ、花屋でカルルの根っこ付きの花を買ってきてくれた。

「この根っこを洗つてすり潰すと、異国の料理の味がするんですよ」

「ほう、何という名の料理ですか?」

「……カ、カリイです」

地球発祥の料理だから名前を聞いても調べられないと思うけど、それは伏せておこう。さて、食材も揃つたことだし、準備を始めましょうか!

『ごうごうと燃える炎を見つめていると、顔が火照つてくる。』

『レーナ、出来上がりが気になるのは分かるけれど、目に悪いわよ』

私が竈の前でじっとスタンバイしているのを見て、隣でお母様が楽しそうに笑つた。

パン生地は全部成形して鉄板に並べ終えたから、後は料理人たちにお任せしてい

る。オープンレンジならともかく、私には竈でパンを焼くなんてこと、できないからね。お母様は着ていたエプロンを外して、私の隣の椅子に座つた。

『……本当に、レーナの発言には驚かされてばかりだわ』

『やつぱりそうですか……』

『責めるつもりじゃないのよ。ただ、あなたと話していると、世界がどんどん開けていくようで』

『そう言つてお母様は、私を後ろから抱きかかえて、すとんと膝に乗せてくれた。わわ

わ、母親の膝の上……一体何年ぶりなんだ!』

『……本当に不思議な子。あつという間に、どんどん遠くへ行つてしまふ。私たちの手の届かない所まで……』

『お母様……』

不思議よね、と微笑んで、お母様は私の顔を覗き込んできた。きれいなコバルトブルーの目が、優しく細められている。

『こんなに小さいあなたなのに、時々大人の女の人と話しているように感じられるの……きつととても大人びているから、そう思うのね』

いや……すみません、お母様。その勘はばっかり当たつてます。私、こう見えて二十

歳なので……

「私は、レーナの自由な所が好きよ。書記部でも、きっとあなたたらしく頑張っているわよね。お母様は、あなたを全力で応援したいの」

じんわりと温かく胸に広がっていく、お母様の言葉。揺つたさを覚えると同時に、胸の奥にずっとわだかまっている私の「秘密」が、ゴソゴソと存在を主張してくる。

——お母様。私はたくさん嘘をついています。

私は……本当は、子どもじゃないんです。それどころか、この世界の人間ですらないんです。

大切な人に嘘をつく後ろめたさと、そんな私を愛してくれる人たちの温かさ。

ごう、と竈の火が燃える。もうすぐ、第一号が焼き上がる頃だろうか。

色とりどりの旗とテント。ぎっちらりと料理が並び、重さで悲鳴を上げそうないくつのテーブル。

「レーナ・フェスティーユです。今日は調子もよく、久々に皆様にお会いできるようになります」

私はお父様に連れられて、お祭りに集まった領民たちに挨拶をして回っていた。

領民の中でも、地方管理係やら財政責任者といった偉い人たちが代わるがわる訪れるので、私はお父様やイサークお兄様たちとその対応に追われていた。

貴族の少女にしては短い髪を隠すために、いつもの大きなバンダナを頭に付ける。服装は隣にいるお兄様とお揃いの、ぱりっとしたラベンダー色のドレスだ。

お父様が先に立つて挨拶した後に、私はお兄様に手を引かれ、お客様たちにニコニコと愛敬を振りまいていた。令嬢たるもの、愛想が一番だ。

「……おまえ、やるな」

声に反応して顔を上げると、お兄様があさつての方向を向いていた。その先には――

おおお、私たちが作ったバラエティーパンコーナーが。他のコーナーも盛況だけど、焼き立ての新作パンが続々と提供されるパンコーナーはひときわ人大かりが大きい。対応している料理人さんたちも、汗を流しながらも嬉しそうにパンを振る舞っている。

「母上に聞いた。あの珍しいパンは、おまえが考えたそうだな」

「はい。王都で食べた料理をもとに考案してみました。食材集めにちょっと時間が掛かりましたけど……」

「おお、ご令嬢があの斬新な味のパンの発案者だったのですね！」

私たちの会話を聞きつけたのか、お父様と話していた官吏がくるつとこつちを向いた。

口ひげの先つちょがくるんとカールした、小粋な感じのおじさまだ。
「いやあ、驚きましたよ！ パンといえば白パンかクロワッサンしか知らなかつたので
すが、新作パンの美味なこと！ 特に、えーと……濃い緑色の……」

「メルコムパンですか？」

「そうそれ！ まさかメルコムをパン生地に練り込むとは！ たいへん美味しかつたも
ので、今、持ち帰り用にいくらか包装して頂いていますよ！」

大げさなほど身振り手振りを交えて話す様子を見ると、気に入つてもらえたようだ。
ほつ。

お父様は私が褒められたことでご機嫌なのか、がはは、と豪快に笑つた。お父様は立
派なお体をしているから、笑うと側にいるだけで肌がビリビリと震える。

「そいつは光榮なことだ！ 実家でも是非、娘のパンを賞味するといい！」

「パンが固くなつた時は、さつと水を吹きかけて温めると、またふわふわになりますよ」
「なんと、素晴らしいアドバイスをありがとうございます、お嬢様！ やあ、こんな
に才能豊かなお嬢様、是非とも息子の嫁に頂きたいのですな……」

「おいおい、それは……」

お父様の機嫌が有頂天から急降下して、がっくり脱力する。たぶん、「娘にはまだ早
いです」とか無難に躲そとしたりがるけれど――

「申し訳ありませんが、妹にはまだその話は早いようで」

ぎゅっと私の手を握つて官吏のおじさんに告げたのは、お兄様――え、まじですか。
イサークお兄様はおじさんから庇うように、おつかなびつくり状態の私を引つぱつて、
にこつと無理矢理浮かべたような笑みを向けた。おお、笑顔が暗いぞ少年！

「妹への結婚の申し込みでしたら、まずは兄である僕を通してくださいますように、ご
子息にお伝え願えますか？ 妹の結婚相手は慎重に吟味したいので――」

「うわー、これがつい先日まで自室に引きこもつていた兄ちゃんの台詞だとは！ さて
はおぬし、お兄様の皮を被つた別人だな？」

静かに威嚇する息子と、十四歳の少年に囁みつかれてビビった様子の官吏と、ぴしつ
と固まつてしまつた娘。そんな状況を見かねたのか、ひとつ咳払いしてお父様はハハハ、
と乾いた笑い声を上げた。お父様、笑い声が無理して感満載ですよ。
「見ての通り、息子は娘にべつたりで！ ……オーソン殿、レーナを嫁にと希望され
なら、まず愚息を倒せるようになつてから来いと、ご子息に伝えてくれたまえ」

すっかり毒氣を抜かれた官吏は挨拶もそこそこに退散していった。真っ直ぐ帰宅するのかと思ひきや、ちやつかりパンコーナーで持ち帰り用のパンを受け取つて。固くなつたらあの方を試してみてくださいね。

官吏を見送つてから、私はそつと目線を上げた。お兄様はもう商売用の笑顔を引つ込めている。

怖い、真顔が怖いよ！

「……あの、お兄様」

「……なんだ、レーナ」

声も低いです。……えーと……怒つてるのかな？

いや、私自身は怒られるような真似をした覚えがないから、ビビる必要はない……よね？

「あの、ありがとうございました」

とりあえず、盾になつてくれたことについてお礼を言うと、お兄様は驚いた様子で、私を見た。徐々に頬が赤くなり、「……別に」とそつなく言う。

言葉はぶつきらぼうだけど、お兄様、手の握り方がさつきよりもきつくなつてますよ。「……僕が言いたくて言つただけだ。さつきの人が何となく気に入らなかつたからで、

別に、その、レーナのためとかじゃない」

「……ツンデレパネエ」

「何か言つたか？」

「何でもありません、お兄様」

私はにつこりと笑つて、不審な顔のお兄様の氣を逸ら^そらそうと、手を引つぱつた。

「ほら、お兄様もお父様も来てください！ レーナ特製のパン、食べましようよ！」

「お、おい、引つぱるなつて！」

お兄様はそう言いつつも、ちゃんと付いてきた。どう考へてもお兄様の方が歩幅が大きいのに、私のちょこちょこ歩きに合わせてくれていてる。

背後では、「じゃあちよつと腹ごしらえするか！」とお父様が伸びをしていた。パンコー
ナーでは、お手伝い中のお母様が笑顔で手を振つて。その横には——あれつ、双子の弟妹レックスとミディアだ。あの子たちも一丁前にお手伝いしているのかな。
パンのいい匂いがする。よし、こうなつたら私も腹ごしらえだ！
私は大切な家族たちに、心からの笑顔を向けた。

感謝祭でバラエティーパンを始めとしたたくさんの中華粉料理を堪能した後、すっかり疲れた私はさつさとゴートウーベッドした。

そして目が覚めたら、そこはなんだか見覚えのある緑の森でした。うーん、どうしてこうも急に場面がころころ変わるのがしらね？ 事前報告ないの、ダメ絶対。

その場に立ち上がりつてうーん、と思案する私。足元の芝生の感触を、素足に感じる。今私の格好は、ベッドに入った時と同じ、ふわりとしたロング丈のネグリジエだ。

夢を見ているのかと試しに頬を抓つてみたけど、痛い。現実だ。

辺りを見回してみると。ここ、見覚えがあるんだよね。たつた一度——それも異世界に召喚された直後に来たつきりだけど、妙に印象に残っている。

私の脳みその端っこにくつついて離れない。そんな感じの、不思議な場所。

緑の森と、青い空と——

「ミーナ、ティル？」

そっと呼びかけると、ひゅつと音を立てて二匹の精霊たちが現れた。

『うーん……おはよう、玲奈』

いつも通りマイペースなミーナが、草地で伸びをして挨拶する。

『おはよう……じゃなくって、ミーナたちはこの状況見ても驚かないの？』

『だって玲奈も驚いてないじゃない』

ミーナの頭の上に乗つかつていたティルに冷静に突っ込まれて、ああ、そうですねティルと、可愛くポーズを取つてみる。こらそこ、白けた目を向けるな精霊。

ミーナもティルも、この不思議な状況に動搖した様子はない。むしろ、何というか——いつも以上にリラックスしてる？

ティルはさつさと舞い上がりつてそちらの木の枝に止まっちゃつたし、ミーナはのそのそと日当たりのいい場所に移動して丸くなつているし。

『ちょ、なんでそんな余裕かましてるの！』

『だってここ、ミーナたちの生まれた場所だもん』

そう言つて、ミーナはくああ、とあくびした。大きく開いた口から立派な犬歯が覗いてる。

地球から異世界に召喚された私。マンホールみたいな黒い穴からひゅーっと落ちて着陸したのが、この緑豊かな森の中だった。

気づいたら、体が縮んでいた。気づいたら、精霊と契約していく——

かさり、と葉が擦れる音が響く。

私はミーナたちに向けていた体を、音のした方にゆっくりと向けた。

こんもりと茂る緑の木々。私のいる場所だけがぽつかり開けているようで、四方はみつちりと木々に囲まれている。

その密集した木々の間に、ちらちらと光の粒が見えた。岩の隙間から清水が湧き出るかのように、光がぼろぼろと零れている。

目を細めて見つめていると、木々の間からすいつと小さな塊が飛んできた。かたまり

すかさず、私のモフモフセンサーが反応する。飛んできたのは、小鳥だった。

周囲の幹の色に溶け込んでしまいそうな落ち着いた茶色で、体のサイズの割に尻尾が長い。テイルはどつちかというとメジロやスズメ系のふつくらとした鳥なんだけど、この鳥は全体的にスマートで、くちばしも長い。つぶらな瞳はくりつとしていて、文句なしに可愛かった。恒温動物最高！

鳥は、物怖じせず私の肩に止まってきた。テイルと違って、肩に乗つても不思議と重さを感じない。

チユルル、と鳥がさえずった。何となく、挨拶されているような気がする。はじめまして……だらうか？

「えっと、はじめまして……？」

『はじめまして。ミーナだよ』

『テイルだよ。鳥の精霊同士、よろしくね』

私に統いて、ミーナとテイルも挨拶をする。テイルの挨拶で分かつたけど、この鳥も精霊なんだね。まあ確かに、「ミーナたちが生まれた」っていう森の中に精霊の鳥がいてもおかしくないけれど。

鳥は私たちの挨拶に応えるようにチュッチュとさえずり、おもむろに私の肩から舞い上がった。そうしてぱたぱたと飛んでいった先——森の奥に目を向けた私は、いつの間にかそこに立っていた人物とばつちり視線が合つてしまつた。

すらりと身の丈の高い女性だ。出る所は出て、引っ込むべき所は引っ込んだナイスなプロポーションの体に薄いシーツ一枚を巻き付けたみたいな服を着ていて、足は私と同じく素足。肌は白色人種も真っ青になるくらいの白さで、つやつやと真珠みたいに輝く

ている。

波打つ髪は眩しいほどの金色で、うねりながら足元まで垂れ下がっていた。平安貴族かつてくらい長いよ、髪。

きれいな卵形の顔は造形も整っていて、さんざん今までイケメン・美女を見てきた中でも、このお方がダンツだわ。なんというかもう、ひれ伏したくなるような神々しさと、優しく細められた金色の目の温かさに当たられて、ガクガク足が震えそうになる。うむむ、ここで倒れたら一生の恥だぞ、玲奈！

金色の美人さんは私を上から下までじっくりと見た後、ふっと微笑んだ。

「初めまして、女神です」

天使の歌声のような美声で、開口一番に挨拶してくださいました。

「……あ、どうも。水瀬玲奈です」

「ええ、あなたのことはずっと前から知っておりました」

「そ、そうですよね。私も女神様のことは聞いていましたよ」

「そうですか？　まあ、わたくしは有名人ですかね」

「ですよねー！」

あつはつは、うふふふ、と笑い声が静かな森に満ちる。チューーン、とちょっと調子の

外れたような声でさっきの小鳥が鳴いて、森の奥へと飛び去っていった。

「……女神様って、こんなにフランクな方なの？」

いやいや、友だち感覚で接しちゃダメだ！

私はぶるっと頭を振り、キラキラ光る別嬪さん——もとい女神様にしっかりと向き直った。

「あ、あの！　あなたが女神様なんですね！」

「はい、そうです」

にっこりと笑う女神様。はらりと額に掛かる金色の髪がとてもなく色っぽいです、

女神様！

「……いか、私って今、「神」っていう存在と対峙してるんだよね。

まじですか、何ですかこのイベント。

「……えーっと、聞きたいことが色々あるんですけど」

「そうですね。あなたには多大な迷惑を掛けてしまいましてから」

そう言って、女神様は悲しそうに目を伏せる。金色の長い睫毛がお美しい。美人は何をしても様になるんだな、本当にツ！

した。何も分からぬままこの世界に放り出してしまって、ごめんなさい。たくさん苦労していたのを、天界から見ておりました

「い、いえいえそんな……」

しまった。女神つてのに会つたら文句を言つてやろうと思つていたのに、言いたかつたことが全部吹き飛んでしまつた。私ごときがこんな美人さんに暴言なんて吐けないよ、ちくしょう！」

「でも……私をこの異世界に召喚したのには、やっぱり理由があるのですね」

「はい。異世界の乙女について、大体の話は人間界にも伝わつてゐるはずですし、そこにいるミーナとティルからも聞いたのではないですか」

名を呼ばれて、くつろいでいた二匹はぴょんと飛び上がつた。

『そうだよ！ 玲奈は特別だから、色々教えたんだ！』

『玲奈も自分で、色々調べてたよ！』

そうだ、と私は今まで知り得た知識を思い返す。

今から約五十年前、戦乱の最中にあつたこの世界を救うため、女神は異世界から呼び寄せた女性に全てを託した。呼ばれた女性の名は、宮野皆実。彼女の必死の説得によつて戦争は終結し、世界の破滅を防ぐことができた。そしてミナミは、自分を助けてくれ

た当時のベルフォード国王と結婚した——だったよね？

私の考えていることが分かるのか、微笑んでいた女神様が、ゆっくりと首を横に振つた。「人間界ではそのように伝えられてますし、精霊たちもあなたにそう教えたことでしょう。けれど、事実は若干異なるのです」

「……えっと、それってミナミが病死と偽つて地球に帰つたっていう？」

思い切つて問うてみる。

王都エルシュタインの書記部にある秘蔵書庫では、ミナミが記した手記の複製版を読むことができた。ミナミは公では若くして病死したことになつてゐるけれど、手記によると、本当はやむを得ぬ事情があり、泣く泣く地球に帰つたのだという。旦那様だった当時の国王と、まだ幼い子どもたちを残して。

でも、女神様は緩く首を横に振つた。

「それはまた別の話ですね。……わたくしは確かに、わたくしが作り上げたこの世界を守るために皆実を呼びました。しかし、わたくしが彼女に期待した本来の役割は、戦争の終結ではなかつたのです」

へ？ ……なにそれ、どういうこと？

「違います。皆実本人にもそのことを伝えたのは、全てが終わってから——皆実が当時のベルフォード国王と結婚してからです。わたくしはただ、世界の崩壊を防ぎたかった。皆実は見事、わたくしの願いを果たしてくれました。戦争の終結は、そのついでに過ぎません」

な、ななな、なにそれ？

女神様はこの世界を守りたかった。だからミナミを呼んだ。戦争の終結は女神様の目的ではなかつたけど、ミナミが女神の願いを果たそつと動いたおかげで戦争が終わりました。

な、ななな、なにそれ？

——無理ッス。お手上げ。

「……じゃあ、何ですか。ひょつとして私もまた、同じように世界の崩壊を防ぐために召喚されたってことですか？」

やさぐれ半分で聞いてみると、女神様はこつくり頷いた。

「そうです」

「えつ？」

「そうです」

「ちょ、待つてよ。まさか私にこの世界を救えっての!?」

「そうです」

冗談だと言つてください、女神様！

「いやでも、どう見つてこの世界、平和そのものですよ！ 戰争なんてどの国でも起きないみたいですし！」

「戦争が世界の崩壊を導くとは言つていませんよ」

……ああ、そうでした。ミナミの時も戦争を止めてほしかつたんじやなかつたんだよね。

「そ、それじゃあ何が、世界の崩壊を招くことになるんですか？」

慌てて問いつめたけれど、女神様の回答はにべもなかつた。

「それは、今は教えることができません」

「えー……？」

「皆実の時も同じです。皆実は、自分がよいと思うことを行つた。その結果、世界の崩壊を防ぐことができたのです」

「そ、それじゃあ……私も、私が思うように動けばいいってこと？」

「そうです」

「……」

攻略本を用意しろとまでは言わないよ！でもさあ、せめて「この人を守りなさい」「この勉強をしなさい」くらい、啓示してくれてもいいじゃんか！」

私のぶうたれた様子を見てか、女神様は困ったように微笑んだ。

「そう怒らないで。あなたは自分の信じる道を進んでください。あなたの存在が、この世界に定められた破滅の運命を覆すことになるのです」

「……私はただの、そこら辺にいる女子大生ですよ」

「そうですね。でも既に、あなたはこの世界の運命を動かしつつあります」

「へいへい、「運命の歯車は既に、狂い始めているのだつた——」ってやつですね。了解。

「皆実もあなたと同じでした。初めは何も知らない、何も分からぬ状態でした。だけどそこからどう動くべきか考え、己の気持ちに従つて動き——世界を救つたのです。基本的に人間界に介入することを許されない私の代わりに」

それは確か、この世界の常識なんだよね。神様の世界も色々と大変なんだねえ。

「ただ、あなたや皆実は異世界の人間。あなたたちをわたくしの手足として、この世界に新しい風を吹き込むことは許されているのです。現にわたくしは一度、あなたに力を貸しました」

「……そうですっけ？」

女神様の力を借りる？ そんなことあつたかしら？

女神様は考え込む私を見て、ゆっくり微笑んだ。

「……あなたは書記官になりたかった。だから勉強して、ベルフォード王国の王都で開催された登用試験に向かいました」

「うんうん、そうですとも。それで、試験中にいきなり文字が読めなくなつて……つて、あああ！」

「あの声!? 試験中に聞こえてきた……」

「覚えていてくれたのですね」

「そう言つて、女神様は笑うけど……あれ、女神様の声だつたのか！」

書記官の登用試験受験中は、精霊を使つた不正防止のための腕輪の装着義務がある。

それを着けたら、私の翻訳係になつてくれているミーナたちとの絆が遮断されてしまい、文字の意味が理解できなくなつた。周りの人の言葉も分からなくなつて、焦りまくつて

いたら——

「あのままでは、せつかく動き始めた運命がまた止まつてしまふ可能性がありました。だから、あなたに少しだけ手を貸したのです」

あの時、頭の中に呼びかけてきたのは女神様。彼女の力で、封じられていた言語理解能力が戻つたんだ。

運命を、動かすために――

ふと、私は顔を上げた。

「……つまり、私は書記部に――もしくは王都に行く必要があつたのですね。女神様は、私が登用試験に落ちてフェスティーユ子爵領に戻つてしまつた場合、破滅の未来に戻つてしまふ可能性が高いとお考えだつた。だったら、この世界を破壊に導く何かは、王都にある……」

ほぼ確信を持つて、私はそう口にした。
あの、平和に見える王都に何かがある。いずれ、世界を滅ぼすことになるだろうきっとかけが――

でも女神様は、やつぱりと言うべきか、緩く微笑むのみだつた。今は答えられないつて、さつき言つてたもんね。仕方ない。

だけど、王都に何があるんだろう。戦争か？ また戦争か？ ミナミの時の問題は戦争じやなかつたみたいだけど、今回もそうとは限らない。

ということは何だ、今以上に王家の方々と親密になつておけといふことか？ 妙なフ

ラグを立てるの、もう疲れたよ……

女神様は、静かに顔を上げた。いつの間にか、空は晴れ渡つた青色から夕暮れ色に変わつて、この前もそうだつたけど、ここ空つて色が変わるの速いよね。

女神様は「時間ですね」と呟いて、私に視線を戻した。そして、私の背丈に合わせるようにしゃがみ込む。

「玲奈。わたくしの大切な子」

「は、はい」

「これからもたくさんのが、あなたの前に壁となつて立ち塞がるでしょう。でも……お願いします。あなたの力で、この世界を救つてください」

「はあ……」

私は勇者様でも無敵の魔術師でも、最強の剣士でもない。ただ的一般ピーポー。その辺に掃いて捨てるほどいる女子大生。

でも、私に何かできるのなら。私が頑張ることで、この世界のたくさんの人を救うことができるなら――

女神様は私の目を見て、満足そうに微笑んだ。そうしてなぜか、自分の左手薬指に嵌つていた指輪を抜く。

「……まだあなたに言えないことがあります。いずれ全てを伝えようと思っていますが、その前に——あなたが不安に感じていること、そのうちのひとつを解消する力を与えましょう」

女神様は、今自分の指から抜いたばかりのそれを、私の目の前にかざした。金色のリングにブリリアントカットされた青い宝石が付いた、シンプルな指輪だ。

「これを、あなたに。あなたは賢い子。この指輪も、きっと上手に使ってくれるでしょう」女神様は体の横にぶらんと投げ出したままだった私の左手を取って、手の平にリングを乗せた。キラキラ輝く指輪は、思ったよりも冷たくて、見た目の割に軽かった。イミテーション……いやいや、何でもありませんっ！

女神様はぎゅっと私の左手を握って、微笑んだ。

「……頑張ってくださいね、玲奈。ミーナとティルも、今後もよく玲奈を支えるように」私の横でじっと待機していた二匹にもそう告げると、二匹は静かにその場で頭を垂れた。普段はちまっこくて可愛い印象の精霊たちだけど、今はとても神々しい。やつぱり、小さくとも神様の遣いなんだな。

女神様が微笑んだ。それと同時に、じわじわと目の前に光があふれてきて——女神様に別れの挨拶をするよりも早く——私の意識は、光の中に溶けていった。



夢か現実か分からぬ時つて、結構困るよね。「あれ？ 今のつて夢だっけ？」つてなること、多いと思います。

私、レーナ・フェスティーユもベッドから起き上がった瞬間は、「あー、リアルな夢だつたなー」で済まそうと思つたんだけど。しっかりと握りしめた左手の中に件の指輪があつたもんだから、夢オチじや終われないよね。

「……ミーナ、ティル！」

『おはよう、玲奈』

『どうしたの、朝から慌てて』

『まずは忠実なる精霊たちに事実確認！』

『私、さつき女神様と会つたりした？』

『うん、会つたじゃない』

『指輪持つてるでしょ』

さも当然、とばかりの返事があつて、私は愕然。

ああ、マジで女神様と会つたんですねえ。いやしかし、美人だつたなあ……

手の中の指輪をしげしげと眺めていると、ドアがノックされた。あ、危ない。指輪落とすところだつた！

「お嬢様、おはようございます。朝ですよ」

メイドの声だ。うーん、この指輪が何の役に立つか気になるけど、まずは朝食に行かない。

私はいそいそと立ち上がり、指輪をテーブルの引き出しの中にしまつた。その後、これじゃ不安だと思い直して、ちょうど空っぽだった宝石入れに入れておく。ぱちんと留め金を掛けて、伸びをする。色々疑問は残つているけれど、今日一日かけて頭の中を整理しよう。

指輪を試すのは、それからだ。

今日一日は、お祭りの後片付け監督やら乗客対応やらで潰れてしまつた。

片付け監督は基本的に父様の仕事なんだけど、急な乗客があつた時にはイサークお兄様が任されていた。イサークは昨日のことがまだ頭に残つてゐるのか、外に出る時に「レーナも一緒に行こう」と誘つてくれた。ついにデレたな、お兄様。

「今朝のパンも美味しかつた」

二人掛けのデッキチエアに並んで腰掛けていると、イサークが朝食の感想を言つた。
私は館の騎士たちがお祭りの片付けをしているの眺めつつ、答える。

「そうですか？」

「……おまえの幸せは安すぎるぞ」

そう言いつつも、声がちょっとだけ震えている。ん？と思つて横目で窓つと——あらあら、顔が真っ赤になつてますよ、お兄様。

「お兄様、顔が」

「言わないでくれっ」

イサークはぶいつと顔を背けてしまつた。さらさらした栗色の髪の隙間から、真っ赤な耳が覗いていますよ。

私はふふっと笑つて、広々としたフェスティーユ子爵領の草原に視線を戻した。朝の冷たい風が気持ちいい。王都にいる間は書記官の仕事が忙しくて、午前中をのんびり過ごすなんて休みの日しかできなかつた。毎日ゆつたり過ごせて幸せ……つと、ここでだらけすぎたら職場復帰が辛くなる。

書記官長には、一応二十日間の休暇をもらつてゐる。往復するだけで十日掛かるから、ここで過ごせる時期は十日間ほど。それももう八日が過ぎたから、明後日には王都に向

けて発つことになる。

あと二日でレーナ・フェスティーユともまたしばらくお別れか……。といふか私、いつまでこの二重生活を続けるんだろう？ そろそろレーナ・フェスティーユが幽霊部員ならぬ幽霊令嬢になりそうだ。イベントの時だけ現れる幽霊。(うん、気味悪い。

お祭りのセットを積んだ馬車がゴトゴトと音を立てて、緩い傾斜を下つていく。その馬車とそれ違うようにして、別の立派な馬車がうちの門をくぐつてきた。またお客様だろうか。お父様もお母様も大変だ、本当に。

豊かなフェスティーユ子爵領を見ていると、本当にこの世界は破滅するのだろうかと疑問を抱いてしまう。女神様が言うんだからそういうんだろうけど、いまいち実感が湧かない。

だつて昨夜の話だと、ミナミの時の世界滅亡の眞の理由は戦争じゃないつてことでしょ。戦争よりも恐ろしいものなんて、あるのかな？ 五十年前の大戦争も相当悲惨なものだつたと聞いているけれど、それを超える何かが、あつた。

今、引き出しの奥にある、青い石の指輪。「うまく使いなさい」って感じで女神様は言つていた。

あの指輪を使うことで、世界の崩壊を救うことができる？　あんな小さな指輪ひとつで？　まさかねえ……。

とはいえ、気になつたら実行。善は急げ。

その日の夜、私は再び引き出しを開けることにした。

草木も眠る、丑三つ時――

私はテーブル脇のランプだけを点けて、手の中の指輪を眺めていた。
さつき廊下に出て様子を窺つたけど、両親も兄弟も全員眠っているようだ。階下に灯りが見えただれど、あれはきっと夜の見回り中の騎士のもの。遅くまでお勤めご苦劳様です。

指輪は、ランプの灯りを受けてキラキラと輝いている。重さはやはり、普通の指輪よりずっと軽い。でも、この輝きは偽物っぽくないな。この青い宝石も、よく見ると内部でぐるぐると光が渦巻いているようだ。きっとかなりのレアアイテムだ。

そういえば、この指輪をもらう直前、女神様に何か言われた気が……何だっけ？
そつと後ろを振り返る。ベッドサイドに据えられた猫用ベッドと小鳥用ベッドにはそれぞれ、ミーナとティルがちょこんと座っていた。どつちもちゃんと目を開けて起きて

いるけれど、さつきからじつと動かないまま、こつちが何を言つてもろくに返事をしてくれない。

この子たちも、私が指輪を嵌めるのを待つてゐるみたいだ。
――よし、なるようになれ、だ！

私は指輪を目の高さに持ち上げる。

さて、どこの指に嵌めようか？　女神様は確かに左の薬指にしていたけど、そこつて結婚指輪の場所だよね。詳しく聞いたことはないけど、お父様もお母様も同じ場所にお揃いのリングを嵌めてたから、こつちの世界にも地球と同じ習慣があるみたい。女神様は……神様だから、結婚しないのかな？　よく分からん。

とりあえず、邪魔にならない指に嵌めよう。右手は利き手だからだめだ。作業する時に邪魔だから、私はアケセサリー類は左腕にしか付けない。

よし、中指でいいか。薬指と中指なら、太さも大して変わらないし。

――待てよ、女神様は全体的にすらつとしてたし、指も私より細いのでは？　これで関節が太すぎて入らなかつたら洒落にならないぞ、私。

考えても仕方ない。私はごくりと唾を呑み、右手で宝石の根本部分を摘んで、そつと左手の中指に通した。おお、さすが女神様からもらった特製指輪。なんと指の太さに合

わせてサイズが縮まりましたよ！ なーんて…………え？

瞬間、ぐらりと視界が揺れた。背後から膝カツクンでもされたかのよう、がくつと体勢が崩れる。前のめりに倒れそうになって、反射的に腕を突つ張った。

あ、あつぶな！ 丑三つ時に自室のフローリングに顔面ダイブとか全然おもしろくない！

ふいに、ぱさりと羽の音がした。ティルが暴れているのかな、と何気なく振り返った私は、その格好のまま停止してしまう。

わざわざ王都の自室から持ってきたミーナとティルのベッドは、どちらもそれぞれのサイズにぴったりで、夜になると二匹はすっぽりと布地に埋まつてくうくう眠つていた。その顔がまた可愛いなあ、と思つてたんだけど。

「……どちら様ですか？」

今、そのベッドの上には、見知らぬ動物たちが鎮座ちんざしていた。

ミーナのベッドにいるのは、大型犬くらいの大きさはあろう、巨大な猫。きちつとお座りして尻尾を体に巻き付けていた姿は凜々しいけど、ああ、せつかくのベッドがお尻の下で潰れちゃつていいよ。

その隣には、これまたダチョウの本体くらいのサイズの、妙にビッグな大鳥様が。ば

さつと翼を広げて——おおお、そうすると子どもベッドと同じくらいの幅になる。なかなか美麗な佇まいだけど……やっぱりお尻の下で、小鳥用のベッドが潰れていた。二匹はぽかんとした私を見て、それぞれ操くわすつたそくに身を捩よじつた。

『玲奈つたら、ぽかんとしちやつて』

『そそう。そんなにびっくりしたの？』

頭に直接、声が響いてきた。この口調、ミーナとティルのものなんだけど、声が……ちょっとと変わつてない？ 小さな女の子みたいな声だつたのが、だいぶ大人っぽくなつてしまんか？

「……ミーナとティル……だよね？」

『そうだよ、ミーナだよ』

大猫はそう言つて、くああ、とあくびした。うわあ、牙一本の大きさが私の親指くらいありそだ。

『これがティルたちが大きくなつた姿。もつと大きくなれば、玲奈を背中に乗せることもできるよ』

そう言つて、ティルも翼を收めてこてん、と首を傾げた。ああ、その仕草！ あのちつちやかつたティルと全く同じ！

えええ、何ですかコレ。ひょっとしてこの指輪、精霊を巨大化させる効果があるんで
すか!?

『そうじゃないよ』

『すかさずミーナが否定する。

『ティルたちが大きくなつたんじゃないの。玲奈……気づいてないの?』

『逆に不安そうにティルに問われてしまつた。気づいてないの、つて……ん?』

私はそつと、自分の胸元に手をやつた。何もない。服がない。いや、それはいい。よくないけど、今はいい。

恐る恐る手を下に滑らせる。ある。確かにある。ここしばらく失われていた膨らみがある。まさか、まさか、と私は転げるよう部屋の隅のドレッサーへ走つた。おかしい、視界が違う。今までと見える世界が違う。肩先までの長さだったはずの髪が、胸元を擗つていて。

どかつとドレッサーの椅子に座り込み、鏡面を覆つていた^{おお}覆い布を一気に剥ぎ取つた。ああ、このドレッサー、自分より背が高いから^{おお}覆いを掛けるにも一苦労だったのに、今は難なく手が届いてしまう。

ミーナが気を利かせて、テーブルの横に置いていたランプを口にくわえ、ドレッサー

立ち読みサンプル はここまで

に向かう私の横に掲げてくれた。ランプの光に照らされて、ほんやりした鏡面に私の姿が浮かび上がる。

長い黒髪に、^{だえんけい}楕円形の顔。子どもの頃よりだいぶ目つきは柔らかくなっている。

日焼けしていない腕に、なげなしとも言つていいけれども確かに胸。

鏡には、全身素^すっ裸^{ぱき}の、純日本人の顔立ちの女が^が憮然とした表情で映つていた。

……まさか、えええ! そういう効果だったの!?

私は鏡の前で、自分の顔やら体やらをべたべた触つてみた。全裸であることはこの際スルーダ。ネグリジェ? その辺に破れたものが転がつてゐるんじゃないかな。

久々に見る本来の自分の姿に、ううう、涙が出そう……そうか、そういうことか。今になって、女神様の言葉を思い出す。「あなたが不安に思つてることのひとつを解消する」とか言つてたよね。それって、体が幼女化していることだつたのか!

試しに、左中指に嵌つてある指輪を抜いてみると――うははは、みるみるうちに体が縮んだぞ!